

巻 頭 言

臨床心理学部 学部長 今井 皖式

2013年4月、本学に教育福祉心理学科が誕生した。小学校教諭、保育士、精神保健福祉士になりたいという志を胸に秘めた若者たちが、キャンパスに新しい風を呼び込んでくれた。夏には全員揃っての一泊研修を経験することで、大学生生活に馴染むための最初のハードルを越え、秋からは少しずつ専門課程に向けて歩み始めている。まだ、おぼこい顔つきの彼らではあるが、4年後にはそれぞれの分野の専門職となって、子どもや保護者、障がいを持つ当事者などにとって最も身近で頼れる存在になっていることだろう。大学が彼らに対してできることは、子どもから大人への変容を遂げていくための場を提供することくらいであろうか。

戦後、日本は目を見張るような経済的復興を遂げ、人々の心もそれに伴って満たされていくかに見えた。ところが、物質的に何不自由ないはずの現代日本で、心の病によって病院にかかる患者の数は320万人を超え、精神疾患こそが国民にとって最も身近な病気となってしまった。また、ここ数年間でも、自然災害による被災や、学童の登校班に暴走した車が突っ込む事故、いじめ・自殺・犯罪被害など、ごく普通の生活を送っているにもかかわらず、突如として悲しい現実に見舞われるような残念な出来事が後を絶たない。そのような時代的・社会的背景のもと、子どもから高齢者まで、保育所、学校、病院、施設などの至るところで、心のケアを提供できる専門家が必要とされており、養成校たる本学は、そのような即戦力を身に付けた人材を現場に輩出することを喫緊の課題として求められている。その意味では大学もまた、変容を遂げる過程にいるのかもしれない。

このような「二重の変容」の渦の中で、若き専門職の卵たちは大らかで明るく、エネルギーに満ち、まっすぐな瞳で明日を見つめている。彼らに対して時に厳しく、時にサポーターに変わりながら、現場に出る前に身に付けておくべき素養を育むことは、教員に与えられた使命であろう。大きな時代の変容の渦の中にありながらも、明日を担う学生たちが社会への最初の一步を踏み出すまでの時間をより充実した場で過ごせるよう、最善を尽くしていきたいものである。